



The effect of ventilation tube insertion or trans-tympanic silicone plug insertion on a patulous Eustachian tube

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2018-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 志織 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3335

論文審査の結果の要旨

耳管開放症では咽頭側から鼓室へ音・圧が減衰なく伝わるので、耳閉感・自声強聴・自己呼吸音聴取などの不快な症状を生じ、日常生活に支障をきたす。有病率は人口の約5%と推定され、保存的治療では改善しない難治例も2-3割存在する。申請者らは耳管開放症には鼻すすり型と非鼻すすり型があることを提唱し、鼻すすり型では放置すると滲出性中耳炎、真珠腫性中耳炎になるおそれが高く、難聴やめまいなどの神経症状をきたすことを報告してきた。今回は、それぞれのタイプの特性を調査し、2つの外科的治療法の有効性について検討した。

対象は難治性の耳管開放症31名44耳で、内訳は鼻すすり群が11名17耳、非鼻すすり群が20名27耳。詳細な問診の後、鼓膜所見、ティンパノグラム、耳管鼓室気流動態法により耳管機能の評価をし、両群の特性を比較した。治療は、浜松医科大学倫理委員会の承認後、シリコンプラグ挿入もしくは鼓膜換気チューブ留置を施行した。平均観察期間は手術後718日で、最終観察日に治療効果を判定した。

その結果、平均年齢は鼻すすり群が38.1歳、非鼻すすり群が59.5歳で有意差を認めた。鼻すすり群では、鼓膜の陥凹、菲薄化、硬化などの異常所見が有意に多く観察された。ティンパノグラムでは、鼻すすり群はA型とC型がほぼ同数、非鼻すすり群はA型を示した。耳管鼓室気流動態法では鼻すすり群の64.7%、非鼻すすり群の18.5%で大きな鼓室内の圧変化が観察され、両群に有意な差を認めた。外科的治療は、シリコンプラグ挿入を鼻すすり群の6耳、非鼻すすり群の27耳に施行し、有効は鼻すすり群66.7%、非鼻すすり群74.1%で有意差はなかった。鼓膜換気チューブ留置は、鼻すすり群の11耳に施行し、90.9%に有効であった。

審査委員会では、悪化する可能性が高い鼻すすり型耳管開放症の特性を見出し、簡便な手技で鼓膜陥凹病変を抑える効果も持つ鼓膜換気チューブ留置が外科的治療の第一選択となり得ることをはじめて明らかにした点を高く評価した。

以上により、本論文は博士(医学)の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 宮嶋 裕明

副査 佐藤 康二

副査 中島 芳樹